

ドンピシャな終末での説話（「手品師」の授業）

墨田区立両国小学校主任教諭 松村広典

この人を知っていますか。（テレビ画面にフィギュアスケート村主章枝（すぐりふみえ）選手の写真を掲示）

2002 年に行われたソルトレイクシティ冬期オリンピックでのことでした。アメリカのサーシャ・コーエン選手が競技用タイツを紛失してしまうという災難に見舞われました。持ち物検査場でカバンの中身を全部出し、その時大切なタイツをその場に置き忘れてしまったのです。しかし、彼女がそのことに気が付いたのは試合直前のロッカールームでした。タイツがなければ競技に出場できず、しかも新しいタイツを用意する時間は残されていません。

コーエン選手といえば、妖精のような美しいスパイラルで観客を魅了するメダル候補選手でした。「どなたか、タイツを貸していただけませんか？」

彼女は必死に訴えますが厳しい勝負の世界、誰も彼女の訴えに耳を貸そうとはしませんでした。

その時、ひとりの選手が履いていたタイツを脱ぎ、コーエン選手に差し出しました。その選手の名は日本代表として参加していた村主章枝選手でした。

競技の結果はコーエン選手が 4 位、村主選手は 5 位でした。

もしもタイツを貸していなければ、順位は変わっていたかもしれません。

でも、村主さんは言いました。

「自分がしたことに後悔はしていません。人として助けたいと思っただけです」と。

村主さんの行動は勝負の世界では正しい行動ではなかったかもしれませんが、でも、村主さんは目の前で困っている人を見過ごすことができず、“自分の心に正直に”行動したのだと思います。

実は、みんなの中にも同じように誠実な人がいて、先生はとても感動したことがあります。

それはテストを返却した時のことでした。ある子が先生にこう言いに来ました。

「先生、ここの問題、間違えているのに丸がついています。」

先生は、「言わなければ分からなかったのに」と言いました。

するとその子は、「このままだとなんかモヤモヤするから」と、さらっと言って去っていきました。

そのままにしておけば点数は高いままで済んだのに、その子は自分が気持ちよくいるために言わずにはいられなかったのでしょう。これこそ誠実な行動だと先生は思いました。